

1 作物

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 早期水稻の中干し</p> <p>(2) 普通期水稻の田植え</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○早期水稻の中干し</li> <li>○普通期水稻の田植え</li> <li>○大豆の播種準備</li> </ul> <p>6月 は普通期水稻の田植え時期であり、大豆の播種に向けた準備時期でもある。5月 12 日高松地方気象台発表の1か月予報によると、向こう1か月の気温は平年並み又は低く、降水量は平年並みの見込みである。ほ場への入水や除草剤処理の際は気象情報に注意し、計画的に作業する。</p> <p>目標穂数の8割の茎数が確保できたら中干しを行う。中干しの期間や程度は気象・土壌条件で異なるが、7～10日程度を目安とし、過度な中干しは控える。中干しの終了は遅くても出穂1か月前とし、中干し後は2～3回走り水を行う。その後にかん水し、3～4日おきに間断かん水を行う。</p> <p>ア 田植え準備</p> <p>品質の良い米づくりのため、耕起までにケイ酸質資材や含鉄資材を投入し、土づくりに努める。ケイ酸には、茎葉を丈夫にし耐倒伏性や耐病性を高め、収量や品質を高める効果がある。鉄は根腐れを防ぐ効果を有している。</p> <p>また、深耕すると根域が拡大し、根張りが良くなり耐倒伏性や収量、品質が向上するため、耕起深 15 cm を確保する。</p> <p>施肥は代かき前3日以内とする。代かきは肥料成分や濁水の河川流入を防ぐため浅水で行い、強制落水を控えて自然減水後に田植えする。</p> <p>なお、麦あとでは耕うんの作業速度を遅くし、できるだけ深く耕起して麦稈を多くの土と混ぜるようにする。代かきは浅水でロータリ回転数や走行速度を落として行う。</p> <p>イ 田植え</p> <p>平坦地における移植適期は、‘ひめの凜’や‘にこまる’では6月上旬～中旬であり、登熟遅延の可能性があるため遅植えを避ける。高温障害が発生しやすい‘ヒノヒカリ’は、6月中旬～下旬に移植する。</p> <p>栽植密度は坪 50 株を基本とすることで、苗箱数削減による</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3)大豆の播種準備</p>	<p>低コスト化、育苗・移植作業の省力化が図られる。ただし、穂数が十分確保できない品種や、地域・ほ場によっては不適な場合もあるので、過度な疎植は避ける。</p> <p>ウ いもち病・雑草対策</p> <p>田植え後の置き苗はいもち病の伝染源となるため、補植が終わった後はすみやかに処分するなど、本田内に放置しない。また常発地や耐病性の低い品種では、本病に適用登録のある箱施用剤を必ず使用する。</p> <p>除草剤の効果を安定させ水田外への成分流出を防ぐため、3～5日間は湛水状態を保ち、除草剤散布後7日間は完全に止水する。除草剤散布後にオーバーフローすると、除草効果の低下や環境の汚染につながるので、散布後に多量の降雨が予想される場合は除草剤散布を延期する。</p>
	<p>ア 排水対策</p> <p>排水対策は転作水田において重要である。本暗きょや弾丸暗きょを施工し、ほ場周囲に周囲溝(額縁明きょ)を設け、適期に播種できるほ場づくりに努める。</p> <div data-bbox="970 1003 1398 1323" data-label="Image"> </div> <p>写真 弾丸暗きょの施工</p> <p>イ 土壌改良資材・基肥の施用</p> <p>大豆は好適土壌 pH が 6.5～7.8、カルシウム要求量の多い作物である。このため、苦土石灰 100～150 kg/10 a を耕起前までに施用する。また、大豆を連作すると地力が低下して減収するため、連作ほ場では堆肥を施用し、地力の向上を図る。</p> <p>基肥は、転作1年目の水田では10 a あたりチッ素 3 kg まで、リン酸とカリをそれぞれ 6 kg 程度施用する。連作ほ場では、地力の低下が心配されるためチッ素成分 3～5 kg を施用する。なお、麦稈をすき込むと一時的にチッ素飢餓を起こすので、基肥のチッ素量を 1～2 割増やす。</p> <p>ウ 種子更新、種子消毒</p> <p>種子は品種固有の特性を備え、粒形が斉一でよく充実し、病害虫被害のない良好なものを選定する。自家採種を続けると、品種の劣化や種子伝染性病害が発生するため、3年に1回は指定採種ほ産の優良種子に更新する。なお紫斑病の予防のため、</p>

項 目	作 業 内 容
	キヒゲン、キヒゲンR-2フロアブル、クルーザーMAXX などにより種子消毒しておく。

(作成 農林水産研究所)